



TITLE:

<研究論文>国際バカロレアの歴史教育に関する--考察 - DP 科目「歴史」とTOK領域「歴史」に注目して--

AUTHOR(S):

次橋, 秀樹

CITATION:

次橋, 秀樹. <研究論文>国際バカロレアの歴史教育に関する--考察 - DP 科目「歴史」とTOK領域「歴史」に注目して-- . 教育方法の探究 2017, 20: 45-52

ISSUE DATE:

2017-04-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/226096>

RIGHT:

許諾条件により本文は2018-05-01に公開

国際バカロレアの歴史教育に関する一考察 ——DP 科目「歴史」と TOK 領域「歴史」に注目して——

次橋 秀樹

1. はじめに

本稿では、国際バカロレアのディプロマプログラム（以下、国際バカロレアについては IB、ディプロマプログラムについては DP とする）における歴史教育の方法を検討する。

IB はもともと、国際学校の卒業生が、それぞれ異なる母国語の大学に円滑に入学できるようにという狙いを持って開発され、1968 年に創設された国際的な教育プログラムである。DP は、後期中等教育にあたる 2 年間のプログラムであり、現在 4 つある IB プログラムの中でも、最初に生みだされたものである。この DP 資格は大学入学資格として国際的に広く通用している。

日本において IB は、2013 年 5 月の教育再生実行会議第三次提言で大きな注目を浴びることになった。1979 年に文部省が DP 取得者を「大学入学に関し高等学校を卒業したものと同等以上の学力があると認められる者」として認めたものの、長く日本国内の DP 認定校は国際学校が大半を占めており、2013 年 5 月時点での認定校は 16 校に過ぎなかった。ここに、DP 認定校を 5 年間で 200 校に増やすこと、当時英語・フランス語・スペイン語しかなかった DP において日本語のプログラム開発と導入を進めることが提言され、文部科学省の支援のもと、日本の学校への紹介・導入が積極的に図られることとなったのである。2017 年 3 月現在、認定校は 31 校と目標数には至っていないものの、日本語プログラムの開発も次々と進み、2015 年 6 月以降は、選択必修の 6 グループのうち外国語以外のすべてのグループを日本語で履修できる科目が選択できることになった（ただし、外国語に加えてもう 1 科目は日本語プログラムがあっても英語等で履修しなければならない）。

この IBDP のうち、本稿では歴史教育がどのように

行われているかについて分析し、考察する。DP の科目「歴史」については、IB 教員であるダッタ・シャミによって日本語で書かれた雑誌連載の報告¹がある。ここでは日本の「世界史」科目の授業との違いにも触れつつ教育目的・方法・評価について実践を含めて紹介されている。しかし、DP のコアの一つとされる TOK（Theory of Knowledge：知の理論）の学びのなかに規定された 8 つの「知の領域」の一つとして存在する領域「歴史」と、科目「歴史」との関係については詳しく論じられていない。また、TOK に関する研究論文や、テキストの一部を訳した書籍も発行されているが、TOK 領域「歴史」を重点的に扱った内容のものは管見の限り見ない。そこで本稿では、DP の科目「歴史」と、TOK 領域「歴史」の学びをそれぞれ明らかにしながら、それらがどう互いに関わりあっているかを検討する。これにより、カリキュラムにおける教科と教科外教育の関係を考えるうえでも有効な示唆を得ることができよう。

なお、本稿では国際バカロレア機構（以下 IBO とする）が作成している教師用「指導の手引き」「教師用参考資料」などに加え、いずれも生徒用テキストとして広く用いられているとされるケンブリッジ大学出版の『Theory of Knowledge for the IB Diploma [IBDP のための知の理論]』とピアソン社の『History: Causes, Practices and Effects of Wars [歴史：戦争の原因、実際と影響]』を主要な分析対象とする。

2. IBDP における科目「歴史」と TOK の位置づけ

IBDP では、科目に偏りがなく（とくに文系・理系のどちらかに偏らないよう）、バランスのとれたカリキュラムであることが元来志向されており、創設以来、母国語（グループ 1）、第二言語（グループ 2）、人文・

表 1 IBDP の科目とコア

国際バカロレア ディプロマプログラム		
必須三要件		
コア	TOK (知の理論)	
	EE (課題論文)	
	CAS (創造性・活動・奉仕)	
No	グループ名	科目例
1	言語と文学	言語A：文学
		言語A：言語と文化
		言語A：文化と演劇
2	言語の習得	言語B
		初級語学
		古典言語
3	個人と社会	ビジネス
		経済
		地理
		グローバル政治
		歴史
		情報テクノロジーとグローバル社会
		哲学
		心理学
		社会・文化人類学
		世界の宗教
4	理科	生物
		化学
		コンピュータ科学
		デザインテクノロジー ■ ジー
		物理
		スポーツと運動と健康科学
		環境システムと社会(グループ3としても可)
5	数学	数学スタンダード
		数学スタンダードレベル
		数学ハイレベル
		数学さらにハイレベル
6	芸術	ダンス
		音楽
		フィルム
		文学と演劇
		美術

斜体：日本語で学ぶことが可能な科目
IBOホームページのシラバスを元に筆者作成（2017年3月現在）

社会科学（グループ3）、自然科学（グループ4）、数学（グループ5）のように、日本で言うところの「国教英社理」を必修選択としている。そのうえで、専門をより深めるために、一部科目を除いて上級（higher level: HL）と標準（standard level: SL）の2つのレベル設定を行っている。DP 資格取得を狙う生徒は、表 1 の6つのグループの中から1科目ずつ選択し、そのうち3科目以上を上級レベルでそれぞれ240時間²、残りを標準レベルで150時間受講する必要がある。なお、グループ6は、他グループの科目で代替が可能となっている。

このIBDPにおいて、科目「歴史」はグループ3「個人と社会」の中の選択科目の一つに位置づけられる。科目設定としての「歴史」は一つであり、「日本史A」や「日本史B」のように世界史から母国の歴史だけを

切り分けた単独科目はない。科目「歴史」で学ぶ内容については後ほど検討するが、教師・本人による学習内容の選択によっては母国の歴史を中心的にはまったく学ばないということも起こり得る。

またカリキュラムについては、6科目のほかに、コアとして、TOK（Theory of Knowledge：知の理論）、EE（Extended Essay：課題論文）、CAS（Creativity/Action/Service：創造性・活動・奉仕）の3つが必修要件となる。IBDP 資格は45点満点中、24点以上で得られる。そのうち6科目が42点を占め（1科目につき7点満点）、TOKとEEは3点にすぎないが（CASは評価対象外）、TOKやEEがともに最低評価のEの場合は各科目の総合点がいくら高くても資格が得られないとされる。国際的な学校やテスト研究を行うフォックス（Elisabeth Fox）は、TOK・EE・CASについて、「この3つの付加要件が、IBをただの一連の試験制度ではなく、ひとつの教育プログラムたらしめている」と評価する³。現在のTOK・CAS・EEの各「指導の手引」においては、いずれも一貫して①教科学習を支え、教科学習に支えられる、②国際的な視野を育む、③自己認識とアイデンティティを培う、という三つのねらいに取り組むとも説明されている⁴。

3. IB科目「歴史」の内容と原理

（1）何を学ぶのか

次の表2で示したように、科目「歴史」において、教師は5つの「指定学習項目」から1項目を選択し（ステップ1）、次に12の世界史トピックの中から異なる地域の2つの事例研究を選択する（ステップ2）。

ステップ1の5つの「指定学習項目」にはそれぞれ2つの事例研究が予め準備されており、その2つとも学ばなければならない。例えば、「3：世界規模の戦争への動き」では、1931-1941年の日本と、1931-1940年のドイツ・イタリアという2つの事例研究が指定される。

ステップ2の12の世界史トピックで取り上げる事例は選択肢の中から教師の裁量で選択できる。ただし、一つのトピックにつき、「アジアとオセアニア」、「アフリカと中東」、「ヨーロッパ」、「南北アメリカ」の4つの地域のうち、異なる複数の地域を取り上げなければならない⁵。また、次節で詳しく述べるが、事例を見る

表2 「歴史」科目学習のステップ

ステップ・ 学習時間の 目安	内容	詳細
ステップ 1 ・ 標準・上 級レベル とも 40 時間	●指定学習項目 1つ選択 1. 軍事指導者 2. 征服とその影響 3. 世界規模の戦争への動き 4. 権利と抗議運動 5. 紛争と介入	選択した 1～5 の項目それぞ れに指定され た地域の異な る 2 つの事例 研究を行う。
ステップ 2 ・ 標準・上 級レベル とも 90 時間	●世界史トピック 2つ選択 1. 社会と経済 (750–1400 年) 2. 中世の戦争の原因と結果 (750–1500 年) 3. 王朝と支配者 (750–1500 年) 4. 過渡期の社会 (1400–1700 年) 5. 近世の国家 (1450–1789 年) 6. 近世の戦争の原因と結果 (1500–1700 年) 7. 産業化のはじまり、発展とその 影響 (1750–2005 年) 8. 独立運動 (1800–2000 年) 9. 民主主義国家の発展 (1848– 2000 年) 10. 独裁主義的国家 (20 世紀) 11. 20 世紀の戦争の原因と結果 12. 冷戦：超大国間の緊張と対立 (20 世紀)	選択した 2 つ の世界史トピ ックそれぞれの 学習テーマ、 指定の学習内 容が示され、例 (これは規定 ではない)も提 案されている。
ステップ 3 ・ 上級レベ ルのみ 90 時間	●地域 1つ選択 1. アフリカと中等の歴史 2. 南北アメリカの歴史 3. アジアとオセアニアの歴史 4. ヨーロッパの歴史 ※日本語による試験は現在 3 と 4 しか用意されていない	1～4 から 1 地 域を選択し、そ の中でさらに 提示される選 択肢から 3 つ のセクション を選択する。
内部評価 20 時間	「歴史研究」	
外部評価	筆記試験：ステップ1～3で選択した内容に関連して	

「捉え方」については細かく指定される。

ステップ2を終えると、上級レベルはステップ3、標準レベルは「歴史研究」へと移る。

上級レベルだけが選択するステップ3で選択する地域のトピックの例は次の表3の通りである。とくに上級レベルではこのステップ3で、特定地域や国家の歴史にやや焦点化して、さらに掘り下げて学ぶことができるようになっている。しかし、これもやはり近現代史に偏っている。例を挙げれば日本の奈良時代や安土・桃山時代の学習機会は最初から存在しない。

「歴史研究」は英語の場合は 2,200 語、日本語では 4,400 字を上限とするレポートである。トピックは生徒

表3 ステップ3 「アジアとオセアニアの歴史」

●以下の 18 セクションのうち 3 つ選択して学習
1: 貿易と交流：中世の世界におけるシルクロード (750-1500 年)
2: 日本の武家時代 (1180-1333 年)
3: 東アジアと東南アジアの探検、貿易、交流 (1405-1700 年)
4: ムガル帝国の隆盛と衰退 (1526-1712 年)
5: 東南アジアの植民地主義とナショナリズムの発展 (1750-1914 年)
6: インド、アフガニスタン、ビルマ (1750-1919 年)
7: 伝統的な東アジア社会への挑戦 (1700-1868 年)
8: オセアニアにおけるイギリスの植民地主義とナショナル・アイデンティティーの出現 (1788-1919 年)
9: 東アジアの初期の近代化と帝国の衰退 (1860-1912 年)
10: インドのナショナリズムと独立 (1919-1964 年)
11: 日本 (1912-1990 年)
12: 中国と朝鮮 (1910-1950 年)
13: 東南アジアにおける世界大戦の影響
14: 中華人民共和国 (1949-2005 年)
15: アジアの冷戦
16: 1947 年以降の南アジアの発展と課題
17: 第二次世界大戦後のオセアニアの発展 (1945-2005 年)
18: アジアの社会・文化・経済の発展 (中国、日本、インドを除く) (1980-2005 年)

の自由選択であるため、標準レベル・上級レベルともに特定の地域・国家をさらに深める機会も提供していると言える。ただし、トピック選択において過去 10 年以内の出来事は不可という条件もある。

(2) 評価方法

科目「歴史」の評価方法は、外部評価 (IBO が行う世界統一の筆記試験・最終試験) と内部評価 (指導する教員による評価) に分かれる。標準レベルでは、外部評価としてステップ1 (短答式資料問題 4 題 60 分)、ステップ2 (小論文 2 題 90 分) が配点比 75%、内部評価としてレポート「歴史研究」が配点比 25% である。上級レベルでは、ステップ3 (小論文 3 題 150 分) を加えた外部評価が配点比 80% で、内部評価が配点比 20% となる。両レベルともステップ1, 2, および外部評価の問題は共通であり、配点比が異なるのみである。また、試験で出題される問題は、各ステップで選択した学習項目・トピック・地域それぞれに合った形が選択して解答できるようになっている。

(3) 特徴

上級レベル 240 時間・標準レベル 150 時間という IB の科目「歴史」の学習時間を日本の高等学校と比較すると、日本で必修修科目となる世界史の学習時間が「世

界史 A」で約 58 時間、「世界史 B」でも 117 時間であるように、世界史だけで見れば両レベルともに及ばない。しかし、進学校でよく見られるように「日本史 B」の 117 時間と合わせた「歴史」全体の学習時間として見れば、日本でも上級レベルに近い学習時間あるいはそれ以上を確保している学校も多いと言え、決して IB の歴史学習時間が多いわけではない。

一方、学習内容は大きく異なっている。日本の歴史科目のカリキュラムとの最大の違いは、通史学習を行うか行わないかということであろう。IB では一つの地域・国家に限定せず必ず複数の地域や事例を扱うこと、その際に時代やトピックを限定して深めていくことが求められる。また、トピックが近現代史に偏っているのも特徴的である。教師の選択にもよるが、例えばステップ 1 で先に事例研究も示した「3: 世界規模への戦争への動き」、ステップ 2 で 10「独裁主義的■家 (20 世紀)」, 12「冷戦: 超大国間の緊張と対立 (20 世紀)」, ステップ 3 でヨーロッパの歴史から近代史の 3 セクションを選べば、すべて 20 世紀以降の歴史を学ぶことになり、DP では古代史や中世史にはまったく触れないということが可能である。さらには、例えば中国といった特定の国の歴史を中心に扱わずに学習を終えることもできる。しかし、トピック 2 で複数地域を学ぶことを義務づけている点、トピック 3 で 4 地域すべてに細かい選択肢を用意している点から、特定の地域、例えば結局はヨーロッパ史しか選択できないといった隘路への誘導は避けられている。このほか、ステップ 1 の全 10 個の事例研究も、すべてを挙げれば中国・イギリス・スペイン・南米地域・日本・ドイツとイタリア・米国・南アフリカ・ルワンダ・コソボが指定されていることから、地域については偏りがないように配置されていることがうかがえる。

(4) どのように学ぶのか

① 科目「歴史」のテキスト

このような選択的学習を支える IB のテキストは、日本における『世界史 B』のように通史を網羅した一冊ではなく、「冷戦」「民主主義国家」「20 世紀の戦争の原因と結果」のようにテーマにつき 1 冊あり、多様である。例えばピアソン社の科目「歴史」テキスト『歴史: 戦争の原因, 実際と影響』を見ても、表 4 のよう

表 4『歴史: 戦争の原因, 実際と結果』目次

1. 20 世紀の戦争
2. 第一次世界大戦の原因
3. 第一次世界大戦と総力戦
4. 第一次世界大戦の結果
5. ヨーロッパにおける第二次世界大戦の原因 集団安全保障の失敗
6. ヨーロッパにおける第二次世界大戦の原因 ヒトラーの戦争
7. 太平洋における第二次世界大戦の原因
8. 第二次世界大戦と総力戦
9. 第二次世界大戦の結果
10. 局地戦のケーススタディ 1 フォークランド紛争 (1982)
11. 局地戦のケーススタディ 2 湾岸戦争 (1990-1991)
12. 内戦のケーススタディ 1 スペイン内戦 (1936-1939)
13. 内戦のケーススタディ 2 中国の国共内戦 (1927-1937, 1946-1949)
14. アルジェリア戦争—植民地からの独立戦争
15. 各戦争と対応 [試験] 問題 (Which War for Which Question?)
16. 知の理論

な内容を含んだ重厚なもので、1 冊は 300 ページを超えている。

② 科目「歴史」の学び方——概念理解の重視

科目「歴史」においては、テーマだけ選択して、学ぶべき内容が指定されていないわけではない。例えばステップ 2 で選択できる世界史トピック 11「20 世紀の戦争の原因と結果」の教師用『「歴史」指導の手引き』を見てみよう。ここでは、次の表 5 に見られるような指定学習項目が定められている⁶。

表 5 トピック 11: 20 世紀の戦争の原因と結果

学習テーマ	指定の学習内容
戦争の原因	・ 経済, イデオロギー, 政治, 領土に関連する原因とその他の原因 ・ 短期的要因と長期的要因
戦争への過程と結果への影響	・ 戦争の種類: 内戦, 国家間の戦争, ゲリラ戦 ・ 技術開発, 交戦圏— 陸, 海, 空 ・ 人と経済資源の動員の度合い ・ 勢力の関与と影響
結果	・ 和平調停の成功と失敗 ・ 領土変更 ・ 政治的影響 ・ 経済・社会・人口への影響, 女性の役割や地位の変化

指定の学習内容として示されているのが、歴史的用語ではなく、歴史の捉え方であることが分かる。本稿では割愛するが、この表に続けて合計 19 の戦争が具体例として地域別に提示されているものの、例については「提案」であり教師と生徒のニーズや興味に応じて別の例を使うこともできることが強調されている。換

言すれば、ここで指定される捉え方が適用できる事例ならば、自由に選択してよいということになる。

テキストもこのような手引きの指定にそった形で展開され、短期的・長期的要因や交戦圏（地図などを用いつつ陸海空の戦闘がどのように進んだかを捉えるもの）や政治・経済・人口への影響などが、戦争ごとにむろん強弱はあるものの一定の形式で説明される。例えば、戦争の結果としての「女性の役割や地位の変化」という捉え方も、日本の教科書ではあまり見られないものであるが、第一次世界大戦後のイギリスにおいては女性の服装や髪型が変化したり、建築家や法律家や陪審員への道が新しく開かれたりした例が紹介されている⁷。また、スペイン内戦を扱った章では、銃を背負った女性戦闘員の写真を掲載し、STUDENT STUDY SECTION, Research activity として「スペイン内戦における女性の役割と、社会において彼女らの役割にこの戦争がどう影響したかを調べよ」という課題が投げかけられている⁸。

こういった学習に対応して、科目「歴史」の最終試験（筆記試験）では、指定項目に関連して「それぞれ異なる地域の二つの戦争を例に挙げ、どの程度女性の役割や地位に影響を及ぼしたかを説明せよ」といった問題が実際ににも出題されている⁹。

歴史学習において、歴史事例の扱いについては柔軟性を認めつつ、幅広い歴史事例よりも捉え方を指定する背景には、以下の一文に示されるように、IBDP が概念理解を重視していることがある。

「指導のアイデア： DP での授業の単元指導計画を立てる際は、関連する主要な概念と、概念的な理解を明確に特定するようにしてください。例えば、第二次世界大戦の原因に関する DP の歴史の単元では、『因果関係』という概念の探究にはっきりと焦点を合わせることができます。これにより、生徒は、自らの概念的な理解を新しい文脈に適用することができるようになります（この例では、『因果関係』という基本的概念の理解が、他の歴史上の出来事の原因に対する理解を助けます）」¹⁰

とくに歴史における重要概念は、原■・結果・変化・連続・重要性・観点とされ、「授業を計画する際には、毎回の授業でどの概念が特に重要かを特定するようにする」ことが勧められている¹¹。DP において、探究や

協働などを重視する指導同様に概念理解に重点を置いて指導を行う理由としては、構成主義的な考えがあることを示し、改訂版タキシノミーを出すにあたってアンダーソンとクラスウォールが述べた、[既存の] 概念的知識が新たな知識を理解へと進ませるうえで重要な役割を果たす、という一文を引用して紹介している¹²。

その一方で、次のような注意も忘れていない。「DP の基盤となるのは、概念、内容、スキルの相互関係です。概念を基盤とするカリキュラムには、『内容と併せて』というよりも『内容を犠牲にして』概念に重点が置かれているのではないかという懸念が伴うため、これを払拭するためにも、この相互関係を強調することは重要になります」¹³

ここで IB が示すスキルとは、とくに科目「歴史」ではリサーチスキル、ほかには批判的思考などの思考スキルやコミュニケーションスキルなどである¹⁴。また、ただ概念理解をすればよいとしているわけではないことは、科目「歴史」の最終試験の次のような問題を見れば分かるだろう。『戦争は解決するよりも多くの問題を生み出した』この主張について、20 世紀の二つの戦争（異なる地域から選べ）を例に挙げ論じよ（1992 年）¹⁵

こういった問題に答えるためには、いわゆる「歴史用語」をいくつも用いなければならない。概念理解を示すために、具体的な歴史的事象（内容）を例に挙げて説明することが試験でも求められている。もし、本当に概念理解だけを問うならば、解答に使用する用語は問題文で与えておき、「次の語句を用いて説明せよ」といった出題方法によって問うことも可能なはずである。

4. TOK の領域「歴史」の内容と原理

（1）何を学ぶのか—TOK の目標および構造

TOK は、具体的で新たな知識を与えるのではなく、あらためて知識とは何かを問いなおすこと、人間がどのようにものごとを知るのかというプロセスを探究するコースである。TOK のねらいは次のように示されている¹⁶。

クリティカル

1. 知識の構築に対する批判的なアプローチと、教科学習、広い世界との間のつながりを見つける。
2. 個人やコミュニティがどのようにして知識を構築するの

か、その知識がどのように批判的に吟味されるのかについて、認識を発達させる。

3. 文化的なものの見方の多様性や豊かさに対して関心を抱き、個人的な前提や、イデオロギーの底流にある前提について自覚的になる。
4. 自分の信念や前提を批判的に振り返り、より思慮深く、責任意識と目的意識に満ちた人生を送れるようにする。
5. 知識には責任が伴い、知ることによって社会への参加と行動の義務が生じることを理解する。

TOK はこのねらいを達成するために、構造化された独特の探究アプローチを用いる。まず、知識とは一人の個人が生成した「個人的な知識」と複数の人間が生成する「共有された知識」があると分類される。それぞれの意味と関係、バランスを考えることで、学習者（knower）としての個人と知識の関係性を問う。そして、言語・知覚・感情・理論・想像・信仰・直感・記憶という8つの「知るための方法（ways of knowing）」が示され、これらが「数学」「自然科学」「ヒューマンサイエンス」「芸術」「歴史」「倫理」「宗教的知識の体系」「土地固有の知識の体系」という8つの異なる「知識の領域」の文脈、個人との関係性においてどのように機能し、相互作用するか探究される^{17）}。

このように TOK では、同じ知識であっても領域によって■有性があるとして、学問を8つの領域を分類する。例えば、「歴史」の知識は「自然科学」が用いるような実験によって生み出されていない。従って、知識がどのように生まれ、どのような不安定さを持つかについても領域それぞれに異なることを学ぶことに意義があるとされる。これらの違いについて、「自然科学」領域と、領域「歴史」を例に挙げれば、TOK のテキスト^{18）}では次のようにも説明されている。

【自然科学】自然科学は、自然界についての主張で、世界がどのように動いているかの法則を解明しようとする。これらの法則は、実験や試験の結果として導き出され、同じ条件下であれば常に真であると主張されます。しかし、このような方法で得られた知識は、どの程度、確かでしょうか。そして、科学的法則は、将来を予測するために、どの程度、有益なのでしょうか。

【歴史】過去に実際何が起こったのかを意味があるかたちで話すことは可能でしょうか。何世紀も前の人々が何を考えていたのか、私たちは確かに知ることができるのでしょうか。歴史を学ぶ際には、必ず直■する「根源的な問い」がいくつかあります。また、この分野の知識が、どの程度、信頼でき、有益であるのかを判断する際に、異なったタイプの歴史的証拠の信頼性について投げかける問いも重要です。

こうした8領域は、学問的な近さによってまとめられているとされ、表1でも示したDPのグルーピングや科目とは一致しないし、「土地固有の知識の体系」の

ように、科目として存在しないもの含まれている。しかし、少なくともそのうち6つの領域についての学習を求める領域の選択については、「数学」や「歴史」といった履修科目と一致させることも推奨されており^{19）}、当然ながらDP科目「歴史」受講者はTOKでも領域「歴史」を学ぶことが期待される。あらためて各科目で学んだ知識を問い直すプロセスにおいて、「知識の領域」同士のつながり、科目同士のつながりも確認され、教科学習との往還も図られるのである。

TOKの学習時間としては、DPの2年間にわたって100時間以上の学習が想定されているが、上記のアプローチに沿って進み、さらに6つの「知識の領域」を扱うとなると、TOK領域「歴史」の学習時間はある程度限定されよう。例えば、IBDP認定校の一つである立命館宇治高等学校の指導案では、単元名『「知識の領域」としての歴史』に対して、8時限（1時限は50分であり実質6時間40分）が与えられている^{20）}。

（2）どのように学ぶのか

① TOKのテキストにおける領域「歴史」

下の表6はケンブリッジ大学出版のTOKテキストの第15章、領域「歴史」の章立てである。

表6 TOK領域「歴史」のテキスト内容

【①～⑨の番号は筆者による】

- ①導入
- ②歴史とは何か
証拠／重要性／過去を説明する
- ③なぜ歴史を学ぶか
歴史はアイデンティティ意識を与える／
歴史はプロパガンダから守る／
歴史は人間の性質についての私たちの理解を高める
- ④過去はどのように知ることができるか
一次資料
- ⑤書かれた歴史
歴史は選択の中の選択である／
あと知恵の強み／あと知恵の弱み
- ⑥バイアスの問題
多面的なアプローチ
- ⑦歴史の理論
「偉人」の歴史理論／経済決定論
- ⑧結論
- ⑨キー・ポイント

これらを通して TOK 領域「歴史」で学ぶことのね

らいは、最後の「キー・ポイント」に要点を見て取れよう。ここには歴史には多様な議論があること、不確実性ゆえに多様な視点で見ることの重要性、学習者にとっての有用性が示されている。

表7 領域「歴史」キー・ポイント²¹【抜粋】

- ・歴史の学習は私たちのアイデンティティに貢献する、プロパガンダから守る、そして人間性を豊かにするという理由で正当化される。
- ・歴史は一次資料に基づいているが、できごとについて選択的な解釈をされているため、いつも価値があるとそのまま受け取ることとはできない。
- ・過去を説明しようとする際、歴史家はあと知恵の有利さを持っている。しかし、これはときどきあと知恵のバイアスという結果をもたらす。
- ・歴史を見る神の目で、完全に客観的に見ることは不可能だが、私たちは過去を多様な視点で見ようとすることによっておそらくより真実に近づくことができる。
- ・歴史は複雑な状況を扱うので、歴史的なできごととはめったに一つの原因によるものではなく、ふつう様々な要因が複合した結果である。

② TOK 領域「歴史」における具体的な問いとは

テキストでは、各項目に関連して、次のような問いやそれに応じたグループ活動の指示が見られる。

表8 TOK 領域「歴史」における Activity²²【抜粋】

- Activity 15.3 ②歴史とは何かー重要性において
あなたの自由な選択基準を使って、以下の出来事の歴史的な重要性を評価せよ。
- a. 1859 年、チャールズダーウインの『種の起源』出版
 - b. あなたの前の■の TOK 授業
 - c. 1948 年、マハトマ・ガンディーの暗殺
 - d. 1930 年のサッカーワールドカップ決勝ーウルグアイが勝利した
 - e. 1955 年、ビル・ゲイツ誕生
 - f. アメリカ前大統領のビル・クリントンのモニカ・ルインスキーとの出来事
 - g. 2001 年、ワールドトレードセンターとペンタゴンへのテロリストの攻撃
- Activity 15.4 ③「なぜ歴史を学ぶか」において
「歴史学習はとても重要なので IB では必修科目にすべきだ」という主張に対してなるべく多くの賛否の論拠を考えよ。
- Activity 15.16 ⑦「歴史の理論ー『偉人』の歴史理論」において
2. 心理学者のニコラス・ハンフリーは、もしニュートンが存在しなくても、誰か別の人間が万有引力の法則を発見しただろうが、シェイクスピアが存在しなかったら、だれもハムレットを生み出すことはできなかっただろう、と言った。あなたは偉大な歴史上の人物はニュートンやシェイクスピアに近いと考えるか。
- Activity 15.18 ⑦「歴史の理論ー経済決定論」において
1. 過去 2000 年の歴史のなかで、どの発明が歴史に最も重大な影響をあたえたと思うか。またそれはなぜか。2. 技術は未来を形作るうえで、個人の行動よりも重大な役割を果たす、というマルクスの主張にあなたは賛成か、反対か。

科目「歴史」においては、歴史の事例を「どう見る

か」という概念理解が重視される一方、TOK の領域「歴史」では、表 8 の Activity15.3 や 15.4 のように、歴史の内容（知識）や一般的な歴史概念そのものを揺さぶる契機を与えている。このように、歴史の知識は見方によっては大きく変わるという意味で、歴史家の役割や方法論についても学ぶ。さらに、Activity15.4 や 15.16 と 15.18 のように、対立的な考え方をあえて提示したり引き出したりすることで、多角的な視点をもつ契機を与えている。また、オックスフォード大学出版の TOK のテキストでは、TOK の『指導の手引き』でも示される「知識の枠組み」（「範囲」「言語」「方法論」など）という領域共通のフレームワークに沿って領域「歴史」を分析するという展開が見られる²³。

5. おわりに

TOK と教科学習の関係について、「TOK の学習は、教科学習を支えるとともに、教科学習に支えられるものでもあり、すべての DP 科目の『指導の手引き』は、教師が担当科目において TOK とのつながりを見つける方法を提案しています」²⁴と述べられている。実際に、DP 科目「歴史」の『指導の手引き』冒頭では「TOK とのつながりをつくる議論の例」として「人間は歴史から学ぶことができるのだろうか」といった 9 つの例が提示²⁵され、テキストでも欄外に「ToK Time」として、当該学習内容を TOK の視点からどのように捉えられるかというヒントが随所に挿入されている。例えば、第一次世界大戦最大の戦いとされる「ソンムの戦い」の項では、「戦争遂行においては、死者・負傷者の発生は避けることができない。しかしながら、ソンムの戦いでは、容認できないほど多くの死者・負傷者を出したと考えられる。戦争における高い損耗率 [rate] は容認できるだろうか。損耗者数 [figure] の多さとは何だろうか。第一次世界大戦当時の大規模な軍隊においては、本当にその数の多くの死者・負傷者を出すことが避けられないということを意味していたのだろうか」と歴史事実を問い直すように促している。

このように TOK では、各科目の学習内容を題材にして、知識そのものを問い直す契機を提供する。問い直しを「歴史」などの科目から分離させて TOK として改めて構造化し、この中で複数の領域を横断することで、科目の枠組みを越えた気づきも与えることにな

り、科目を往還する有効な仕掛けとして機能する。また、TOKでの既存知識の問い直しは、科目「歴史」の学びも、さらに深い思考のあるものへと導く仕掛けとなっている。なぜなら、TOKはまさに研究者の思考プロセスでもあり、その追体験とも言えるスリリングな学問体験だからである。

■Bの科目「歴史」のカリキュラムについては、例えばイギリスのように、時代・地域を限定したトピック学習を中心に、学年を追うとともに時代が進むという歴史学習の蓄積のうえならば、これに続く後期中等教育段階で学習範囲が近現代寄りであったり、トピックが限定的であったりしたとしても、IBとのカリキュラムの適合性は高いと言える。しかし、通史学習を基本とする日本のカリキュラムへ移入することを考えるならば、さらなる検討の余地がある。

たしかに、■Bの歴史教育からは、「捉え方」の指定や概念重視、通教科的なコースであるTOKからの問いかけなど、学ぶことのできる点も多い。しかし、通史学習を通して、歴史の大きな流れをつかむこと、広い地理的・歴史的範囲の中で繰り返されるいくつかの小さな法則性に自ら気づき、概念理解を深めていくこともまた歴史を学ぶ意義であり面白さである。この点においては、近年の探究学習への流れの中で、従来の日本の歴史教育の成果も立ち止まって再評価すべきであろう。

参考文献

①IBOのホームページ「日本の学校のためのリソース」
[<http://www.ibo.org/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/>] (2017年3月30日確認) より以下の資料

『「歴史」指導の手引き』、『「歴史」教師用参考資料』(いずれも2017年第1回試験)、『知の理論(TOK)指導の手引き』(2015年度第1回試験)、『ディプロマプログラムにおける「指導」と「学習」』

②Keely Rogers, Jo Thomas, *History: Causes, Practices and Effects of Wars for the IB Diploma*, Pearson Education Limited, 2010.

③Richard van de Lagemaat, *Theory of Knowledge for the IB Diploma*, second edition, Cambridge University Press, 2013.

④Eileen Dombrowski, Lena Rotenberg, Mimi Bick,

Theory of Knowledge: Course Companion, 2013 edition, Oxford University Press, 2013.

⑤ダッタ・シャミ「連載 国際バカロレアの現在 50〜53」『文部科学教育通信』No.373-376, 2015年10月12日〜2015年11月23日。

注

1 参考文献⑤。

2 IBDPの単位時間は60分である。

3 Elisabeth Fox, *International Schools and International Baccalaureate*, *Harvard Educational Review*, Vol.55, No.1, February, 1985, p.59.

4 『知の理論(TOK)指導の手引き』p.5。

5 『「歴史」指導の手引き』p.26

6 『「歴史」指導の手引き』p.39。

7 参考文献②, p.86。

8 同上書, p.246。

9 同上書, p.299。

10 『ディプロマプログラムにおける「指導」と「学習」』(以下、『「指導」と「学習」』とする)p.28。

11 『「歴史」教師用参考資料』p.11。

12 『「指導」と「学習」』p.28。

13 同上書, p.27。

14 スキルについては、とくに同上書のpp4-21に詳しい。

15 参考文献②, p.294。

16 『知の理論(TOK)指導の手引き』p.16。

17 同上書, pp.9-10。

18 Sara Santrampurwala, Kosta Lekanides, Adam Rothwell, Jill Rutherford, Roz Trudgon 著, 田原誠, 森岡明美訳, 『知の理論 スキルと実践』オックスフォード大学出版局, p.14。

19 『「知の理論」(TOK)指導の手引き』p.35。

20 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議「国際バカロレア・ディプロマプログラム Theory of Knowledge(TOK)について」2012年8月, pp.107-111。

21 参考文献②, P.439。

22 同上書, pp.420-437。

23 参考文献④, pp.274-294。

24 『「指導」と「学習」』p.6。

25 『「歴史」指導の手引き』p.9。

(博士後期課程)